

2019年12月6日 アウシュヴィッツ演説

アウシュヴィッツ＝ビルケナウ財団 10周年記念式典にあたって

アンゲラ・メルケル（ドイツ首相）

訳・解説 三島憲一（大阪大学名誉教授）

尊敬する首相閣下

尊敬する所長閣下

要職にある皆様

そしてなによりもあの時代の証人であられる尊敬する皆様

ご参会の皆様

本日この地に立って、ドイツの首相として皆様に語りかけるのは、決して容易なことではありません。この地でドイツ人たちが犯した野蛮な犯罪を考えると、私は深い恥じらいの気持ちをいただきます。これはいっさいの理解能力の限界を超えた犯罪なのです。この地で女性、男性、そして子どもたちに対してなされたことを思うと、驚愕のあまり、本当は沈黙している以外にありません。どんな言葉がこの悲しみに対応できるでしょうか。この地で、屈辱を受け、苛まれ、そして虐殺されたすべての人々を悼む思いに対応できるでしょうか。とはいえ、どんな地よりも、人類最大の犯罪と不可分に結びついているこの地でこそ、それがどんなにつらくても、沈黙だけが私たちの唯一の答えであっては決してなりません。この地こそは、記憶を保ち続けるように、私たちに義務を課しているのです。私たちは、この地で犯された犯罪を思い出し、そしてこの犯罪を明確に言葉で言わねばなりません。

アウシュヴィッツ。この地名はヨーロッパの何百万ものユダヤ人男女に対してなされた殺戮を意味します。すなわち、いっさいの人的価値が犠牲となったショアという文明の断絶のことです。またアウシュヴィッツの地名は、シナイおよびロマの方々に対する民族抹殺を、そして政治的理由で拘束された方々、ポーランドの知識層、抵抗運動の方々、ソ連邦およびそのほかの国々の捕虜の方々、ホモセクシュアルおよび身障者の方々、そのほかにもヨーロッパ全体の無数の方々に加えられた苦痛と彼らになされた虐殺を意味しています。アウシュヴィッツでの人々の苦しみ、ガス室での死、飢餓、酷寒、疫病、激痛

で苦しませるエセ医学的な実験、疲労困憊に至る強制労働——この地で起きたことは、人間の頭では理解できないものです。

アウシュヴィッツ強制収容所だけで、少なくとも 110 万人が、計画的かつ冷酷な体系性を持って虐殺されました。大部分はユダヤ人です。彼らの一人一人には名前があり、譲りわたすことのできない尊厳が備わっており、それぞれの出身と歴史がありました。すでにこの地までの、家畜輸送列車に押し込まれての輸送、到着時の手続き、ホームでの選別、それらはすべて彼らを人間扱いないことを、彼らから尊厳と個性を奪う事を目ざしたものでした。

この地は、公式には、ユネスコの世界遺産の一部として今日では、「アウシュヴィッツ＝ビルケナウ——ドイツ・ナチスの強制収容所および絶滅収容所 (1940-1945)」というタイトルを持っています。このフル・タイトルは重要です。この街オシフィエンチムは、ポーランドにありますが、1939 年 10 月に、ドイツ帝国の一部として併合されました。アウシュヴィッツは、ドイツの、ドイツ人によって運営された絶滅収容所なのです。私にとってはこの事実を強調することが重要なのです。下手人たちをはっきり名指すことが重要なのです。私たちドイツ人は犠牲者に対して、そして私たち自身に対して、そうする責任があるのです。

犯罪を記憶し、下手人たちをはっきり名指し、犠牲者たちの尊厳にふさわしい哀悼の心を保つこと、この責任に終わりはありません。この責任にはいかなる変更の余地もありません。この責任は、私たちの国と不可分に結びついています。この責任の自覚は、私たちのナショナル・アイデンティティの確固たる構成要素なのです。啓蒙された自由な社会、民主主義と法治国家という自己理解の確固たる一部なのです。

今日のドイツではユダヤ人の生活が再び花開いています。イスラエルとも、多様な、そして友好的なつながりがあります。これは決してあたりまえのことではありません。これは私たちへの大きな贈り物であります。ほとんど奇跡ともいえるものです。だが、こうしたことも、起きたことを起きなかったことに変えることはできません。虐殺されたユダヤ人の方々を連れ戻すことはできません。私たちの社会には、大きな穴が開きつづけることでしょう。

今から 70 年前にドイツ連邦共和国の基本法が発効しました。この基本法には過去の教訓が流れ込んでいます。しかし、私たちが自覚していることがあります。それは、人間の不可侵の尊厳、自由と民主主義、そして法治国家、こうしたもろもろの価値がいかに貴重なものであろうとも、これらはまたきわめて傷

つきやすいものでもある、ということです。それゆえ私たちはこうした基本的な価値をその都度新たに確固たるものとして、いくども改良し、守り、擁護していかなければなりません。——毎日の共同の生活のなかでも、また国としての活動や政治的議論を通じても。

最近のなりゆきを見ていると、こう述べるのは、単なるレトリックでは決してありません。このことをはっきり述べる必要があります。なぜなら私たちは目下のところ、きわめて憂慮すべき人種差別を、不寛容の増大を、ヘイト犯罪を経験しているからです。自由民主主義の基本的諸価値に対する攻撃を、そして、グループ分けした人間憎悪をめざした危険な歴史修正主義を経験しているからです。特に、反ユダヤ主義に注意を向けねばなりません。ドイツ、ヨーロッパ、そしてさらにはその外でもユダヤ人の生活を脅かしている反ユダヤ主義に気をつけねばなりません。

だからこそ私たちはここではっきりと明確に意思表示をしなければなりません。「われわれは、反ユダヤ主義を許さない」と。どんな人々も、私たちのドイツで、そしてヨーロッパで安心して、我が家にいるのと同じ気持ちでいられなければなりません。まさにアウシュヴィッツこそは、私たちのひとりひとりに、日々気を配るように、そして人間らしさを維持し、私たちの隣人の尊厳を守るようにと、警告し、義務づけているのです。

というのも、100年前にトリノで生まれ、アウシュヴィッツ収容所のモノヴィッツ地区〔サブ＝キャンプがあった〕で強制労働者として生き延びたプリモ・レーヴィ⁽¹⁾の「こういうことが起きた以上は、もういちど起こりかねない」という言葉のとおりだからです。それゆえ私たちは、人間に侮蔑的な言葉が吐かれたり、彼らが蔑視されたり、排除されたりするのを見たり、聞いたりした時に、目を閉じたり、耳を塞いだりしてはならないのです。信仰や出自を異にする人々に対する偏見や憎しみを煽ろうとする人々に、私たちは反論し続けねばなりません。

私たち皆に責任があるのです。そしてこの責任には、思い起こすということが含まれます。私たちは決して忘れてはなりません。終止符ということはありませんし、相対化ということもあり得ません。

さらに、アウシュヴィッツの生存者で、国際アウシュヴィッツ委員会の元委員長のアハ・フルーク氏⁽²⁾の言葉を引かせていただきたいと思います。彼は、こう述べています。「記憶というのは水のようなものだ。記憶は生きていくのに不可欠で、水と同じに、新たな空間へ、そして新たな人々へと通路を切り開い

ていくのだ。……記憶には、賞味期限切れということはない。記憶は、これで消化した、これで終わりといった決議ができる性質のものではない」。

生きていくのに不可欠な記憶が、ノアハ・フルーク氏の言うように、その通路を求め、見出していくものだということを、われわれは多くのあの時代の証人たちのおかげで知っています。それゆえ、今日ここであの時代の証人の方々³の幾人かをお迎えできたことは、私にとってたいへん嬉しいことであります。皆さんは、この過ぎ去った年月のあいだ、なんどもなんども、そして今日は私たちの前で、辛かった時期についてお話しして下さいました。あの辛い経験をいくどとなく思い起こし、しかも、いくどもこの土地に立ち戻ることがどれほど大変なことなのか、想像することは誰にも不可能です。皆さんは、若い人々が学べるようにと、皆さんの経験された歴史を私たちに分かち与えてくださいます。皆さんは和解のための勇気と力を振り絞ってくださいます。本当に人間的に偉大なことです。私たちが皆さんのお話を伺い、学ぶことができることに私は深く感謝しております。

アウシュヴィッツが解放されて、もうじき 75 年になります。この時代の歴史を語れる人はどんどん少なくなっています。それゆえナヴィット・ケルマーニ³は適切にも次のように述べています。「警告の記念碑や蹟^{つまずき}の石⁴や追悼の儀式に込められた記憶が、本当に心の中に焼きつけられるためには、将来の世代が、自らの目で、ドイツが人間の尊厳を轢^{つづ}き潰したいくつもの場所を自分の目で見る⁵こと、そしてドイツが血に染めた国々を自ら旅することが、今よりももっと重要になるでしょう」。

多くの場所で下手人たちは、証拠を隠滅しようとしてきました。ベウジェツ、ソビボル、トレ布林カのような絶滅収容所で、マールィ・トロステネツ [ベラルーシのミンスク郊外の、強制収容所のあった村] やバビ・ヤール [ウクライナの首都キエフ郊外の谷、キエフのユダヤ人多数が虐殺された現場] で、そしてユダヤ人、シンティおよびロマの人々、そしてヨーロッパ中で多くの人々が、時にはひとつの村ごと虐殺された何千という場所で、証拠隠滅がはかられました。

しかし、ここアウシュヴィッツでは、親衛隊とその手先たちは、証拠を抹殺することができませんでした。この土地自身が証言です。そしてこの証言は守らねばなりません。アウシュヴィッツに来て、見張りの塔、鉄条網、収容所の建物、そして牢獄の部屋を、ガス室や焼却炉の残っている一部を見た人からは、記憶が消えることはないでしょう。その記憶は、ケルマーニが言うようにまさに「心に焼きつく」でしょう。

10年前に、ポーランドの元外務大臣であり、自らも政治犯としてアウシュヴィッツに入れられていたヴァディスワフ・バルトシェフスキ氏[1922-2015]は、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ財団の設立のイニシアチブをとってくださいました。

ここにいらっしゃるチウインスキー [アウシュヴィッツ＝ビルケナウ記念館館長] さん、あなたおよび、この財団でこの追悼の場を、警告のための記念の場として、また資料センターとして維持することを仕事にしておられるすべての方々に、私は心からお礼を申し上げたいと思います。また修繕や維持のプロジェクトに関わっておられるすべての方々にもお礼を申し上げたいと思います。この地が今後とも証言を続けることができるようにと、大変な尽力がなされましたし、また現在もなされ続けております。収容所のレンガの獄舎は、今後とも維持されることがたしかですし、発掘作業も続いていますし、防御壁や防御テントも作られました。犠牲者から奪った衣服や所持品も修復がなされ、保存されています。

この保存計画のためには、今後 25 年間にわたる財団基金をかなりはつきり増額しなければなりません。ドイツはこれに金銭的に大きく加わるつもりであります。このことを昨日、ドイツ各州の首相とともに決めたところであります。

この財団のおかげで、また多くの国際的な案内係の方々のおかげで、この記念の場は、学習の場、沈思の場、自覚の場となっています。「二度とこういうことのないように」というメッセージを強く発する場となっています。このことに私はお礼を申し上げたいと思います。

とはいえ、なにをしても、ここで虐殺された人々を取り戻すことはできません。なにをしても、この前例のない犯罪をなかつたことにすることはできません。この犯罪は、ドイツの歴史の一部であり、今後もそれであり続けます。この歴史はいくどもいくども語り続けねばなりません。それは私たちが気を張り続けるためであり、こうした犯罪がその端緒すら二度と起きないようにするためであり、私たちが人種差別と反ユダヤ主義のありとあらゆる不愉快極まりない現れに対して断固として対処するためであります。この歴史は語り続けねばなりません。それは、私たちが今日も明日もどんな人間であってもその人の尊厳を守り続けるためであり、犠牲者に対してその名誉をたたえ、追憶を続けるためであります。

私たちは今、ヨーロッパのさまざまな国からアウシュヴィッツに移送された方々のことを思い起しています。私たちは今この地でまた、特に多くのポーランド人の犠牲者のことを、政治犯も含めて思い起しています。当初はこのポー

ランドの方々を収容するために、この強制収容所が建てられたのです。私たちは今、虐殺された 600 万のユダヤ人の方々のことを、そして特にこのアウシュヴィッツ＝ビルケナウで虐殺された約 100 万人のユダヤ人の方々のことを思い起しています。私たちはまた、移送され、拷問にかけられ、そして虐殺されたシンティとロマの方々のことを思い起しています。また、銃殺隊による大量虐殺の犠牲者たちのことを思い起しています [ガス室以外にいわゆる「死の壁」に立たされて銃撃で数千人が殺されている]。ゲッターに移送されたのち、死の恐怖に怯えながら隠れていた方々のことを、そして、故郷から逃げねばならなかった方々のことを思い起しています。すべてを失った方々のことを思い起しています。すべてとは、家族、友人、故郷、自分たちのふるさとであり、希望と計画、信頼と生きる喜び、そして尊厳であります。戦後も何年にもわたってあちこち彷徨い続けた方々、そして収容所で「難民」として耐え続けねばならなかった方々のことを思い起しています。

生き延びた方々は、遭遇した恐怖に打ちひしがれ続けていました。マルゴット・フリートレンダー⁽⁵⁾ は、回想録のなかでそれについてこう書いています。「彼らは、自分たちが人間であることを学びなおさねばなりません。名前を持った人間であるということ」。

多くの方々は、なぜ自分が生き延びたのか、なぜ自分の代わりに妹が生き延びなかったのか、なぜ、親友が、あるいは自分の母親や夫が生き延びなかったのか、と問い続けました。また多くの方々は、自分の近親者がどこでどのようにして虐殺されたのか、長いことわからなかったか、あるいはわからないままでした。こうした傷が癒えることは決してありません。

それだけいっそう私は、そのことについて語るに至った方々、苦痛と追憶を分かちあうために、そして和解をはじめするために語りだした方々すべてにお礼を申し上げたいと思います。こうした方々すべての前で私は深く頭を垂れる者です。ショアの犠牲者の前で、そしてその方々のご家族の前で深く頭を垂れる者です。

注

- (1) プリモ・レーヴィ (1919-1987)。第二次大戦中、抵抗運動の最中にスイスとの国境近くのイタリア側で捕えられ、強制収容所に送られる。生還後、アウシュヴィッツでの経験をもとに『これが人間か』(朝日新聞出版)などの多くの著作を発表
- (2) ノアハ・フルーク (1925-2011)。ポーランド生まれのイスラエルの経済学者。アウシュヴィッツ生存者としてホロコーストの記憶の保持のための様々な活動をしていた。

- (3) ナヴィット・ケルマーニ（1967-）。イラン移民の二世としてドイツに育った。ドイツ文学、イスラム学その他を学び、ヘルダーリンやジャン・パウルについての著作もある評論家・文学者。イスラム圏とヨーロッパの相互理解に尽力。またナチの蛮行のあとを東ヨーロッパに追った旅行記でも有名。イラン系である以上、自分にも両親にも直接責任のないドイツの犯罪だが、ドイツ国籍を持っている以上は当然に、記憶の責任がある、と論じてアウシュヴィッツ参観にあたって言語別のグループに分かれる時、ドイツ語と同じに理解できるペルシャ語ではなく、当然ドイツ語を選んだ、という選択は有名になった。一時は大統領にという話もあった。
- (4) ベルリン、フランクフルトなどの都市では、かつてユダヤ系市民が住んでいて連れて行かれたマンション前の歩道に、当該ユダヤ人の名前と連れて行かれた日付や殺された日付が、当該の強制収容所の地名とともに彫られた金属がはめ込まれている。「躓きの石」と名付けられた、日々の警告である。
- (5) マルゴット・フリートレンダー（1921-）テレージエンシュタットの強制収容所の生還者。戦後アメリカに渡りアメリカ市民となったが、2010年、故郷のベルリンに戻り、ドイツ各地の学校で、自分の経験を語り続けている。

世 界

2020年5月号より